

ズームアップ経済統計

経済統計から高橋財政を検証する(下)

(日本統計協会「日本長期統計総覧」)

ジャパンマクロアドバイザーズ チーフエコノミスト 大久保 琢史

今回は高橋財政（高橋是清が1931～34年に大蔵大臣として行った政策運営）の金融・為替政策面を分析したが、今回は財政政策について検討する。高橋財政に対する評価はいまでも大きく分かれる。リフレ派からは、財政拡大は一時的なショック療法にすぎず、財政もいったんは健全化に向かったと肯定的に評価されている。反対に、30年代後半から軍事費が急増し、第2次世界大戦を経て破局的なインフレーションに向かう原因をつくったと批判する向きも多い。経済統計からは高橋財政をどのように検証できるだろうか。

高橋蔵相が、財政支出を拡大したことは間違いない。満州事変に伴う軍事費増大、また32年からは「時局匡救事業」という景気対策を打ち、中央銀行による国債引受けも実行した。日本統計協会が出版する『日本長期統計総覧』に収録されている財政統計によれば、一般会計ベースの歳出は31年度の14・8億円から32年度には19・5億円、33年度には22・6億円へと急ピッチで拡大した。しかし、歳出の拡大は必ずしも財政の不健全化を意味するものではない。景気が回復し、税収・経済規模が拡大すれば、結果として歳出の拡大が

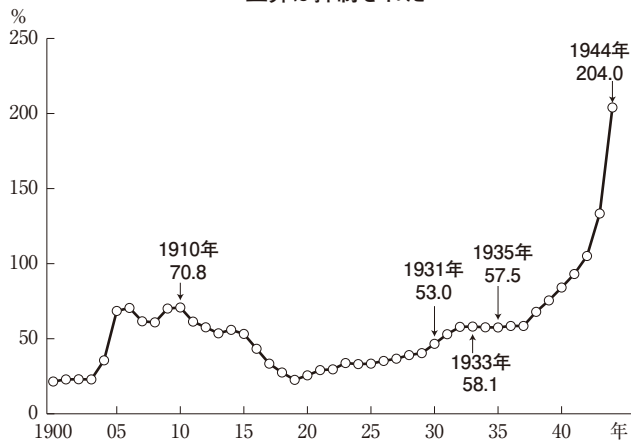
財政改善につながることは十分ありうる。

財政の中長期的な健全性を示す指標として、現代でも注目されているのは「政府債務対GDP比」だろう。『日本長期統計総覧』に収録されている「政府債務現在高」と「国民所得諸推計」を組み合わせて政府債務対GDP比を計算すると図表のようになる。これによると、高橋財政のもとで日本の財政が即座に悪化したわけではないことがわかる。政府債務対GDP比は31年度（53・0%）から33年度（58・1%）まで緩やかに上昇した後、35年度にかけてわずかながら減少している。参考までに高橋財政開始前の動向をみると、デフレが進行するなかで政府債務対GDP比は悪化の一途をたどっている。高橋財政による支出拡大はデフレを解消することで財政の悪化を抑制したといえよう。

さて、高橋財政はアベノミクスにどのような示唆を与えるだろうか。一つは、財政拡大や金融緩和によりデフレを解消することは可能という

高橋財政のもとで政府債務対GDP比の上昇は抑制された

〔図表〕



(出所) 日本統計協会、Japan Macro Advisors

ことだ。ただしその半面、リフレ成功後に緊縮財政や軍事費抑制に転じた高橋是清は暗殺され、日本の財政は拡大路線を抑えることができず、破綻に向かったということも歴史の「コマ」として受けとめておくべきだろう。また、高橋財政のなかで開けられた日銀国債引受けという「パンドラの箱」が財政の統制を緩めたように、現在の日銀の異次元緩和が財政規律を緩めていることも類似しているように思われる。